

## 「伝統文化の継承と世代間交流による次世代育成事業」

444年の伝統「大東七夕祭り」本気で祭りを楽しむと地域の未来を担う人材も育つ事業  
雲南市 大東地区自治振興協議会

### 1 大東地区の概要

大東地区は、雲南市大東町の中央に位置し、地区人口は3,579人である。これに対し大東町は12,250人、雲南市は38,392人となっている。（平成31年2月現在雲南市公表人口より）

地区内には、島根県立大東高等学校、雲南市立大東小学校、雲南市立大東こども園、雲南市立大東保育園などの教育機関がある。春には、地区中心部にある丸子山公園で、満開に咲き誇る桜の花見を楽しむことができる。また、地区を流れる一級河川赤川では、6月上旬ごろ乱舞する蛍を見ることができる。そして8月6日に開催される大東七夕祭りがある。

### 2 事業の趣旨

#### (1) 大東七夕祭りの歴史と現状

本年度、第444回を迎えた「大東七夕祭り（毎年8月6日開催）」は1570年代、毛利と尼子の戦いが終わり、七夕の夜に村人が笹竹の枝に短冊を飾り付けて争いのない平和の世を祝ったのが始まりと言われ、大東町の伝統である。中でも19:30頃から、浴衣や法被で着飾ったこどもたちが笹竹を手に大提灯や山車と町内約1.5kmを練り歩く行列、その後、行列終着点で赤川へ向けての子ども花火は最大の見所である。それに参加するのは、地区内の12宮（自治会）住民で、小学生とその保護者が中心となる。祭り準備は子どもにとって大きな楽しみの一つである。

行列の参加対象地区人口は2,157人で、近年は700人程度が行列を行う。この他の町内の地区も、当日の

運営への負担金など行っている。祭りに訪れるのは、町の人だけでなく1～2万人の観光客もあり、まちにとって大規模な祭りである。また、商工関係者などもステージイベントや飲食関係のブースを催すなど、祭りを盛り上げる。

伝統ある祭りであるが、少子高齢化による担い手不足や、世帯数の減に伴う負担金など資金面での不安があることが否めない現状である。

#### (2) 事業で育成したい人材等

前述で触れたが、小学校を卒業すると祭り参加の条件から外れるため、子どもや保護者が参加しなくなる場合が少なくない。また、町内でも12地区が対象のため、それ以外の若者などの参加機会は多くはない。この為、この事業では参加の機会を増やす取組を行い、高校生や大学生・20代から40代世代（「学生・若者グループ」と以下では表現）の積極的な参加を促し、祭りを楽しみ地域への愛着を育むことで、この地域の様々な課題をも解決しようとする人材やグループを育成したいと考えた。

### 3 具体的な取組内容

- (1) 高校生による祭りの魅力アップ&準備の助っ人プロジェクト①生活科学部による行列参加の女子小学生にイヤリングを作成して祭りを彩った。②希望する地区へ準備や行列の助っ人として高校生が参加。



(高校生が作ったイヤリングを手渡す)

(2) 若者グループによる七夕まつり PR & 外部参加者誘致①YouTube 動画や記録動画を作成し行列参加への様々な人への PR を行った。②関東、関西からの参加者に準備段階からかかわってもらうアテンドを行った。③記録動画を使って若者グループ中心の振り返り会を開催した。



(県外参加者をアテンドし行列ののち地域参加者とも交流会で懇親を深める)

(3) 七夕祭りから地域の魅力再発見①外部講師として一般社団法人マツリズム大原学代表を招き、大原氏コーディネートの取り組み前ミーティング会、ワークショップ、振り返り会を6回開催した。②これまでの取り組み・今後の展望を描く発信動画を作成。(若者グループの取り組みと連動)



(2018年11月30日WS事業の実施にあたり、運営の母体である大東七夕祭保存会からのご支援もあり、のびのびと活躍した若者たち)



(2018年7月25日高校生と講師のWS)

#### 4 評価と成果

高校生、大学生、若者が、自発的に参画できるような取組を目指した。それにより想定参加者を常に上回った。そして振り返り会では、参加者からも若者からも取り組めたことへの良い感想が聞かれ、今後も引き続き地域に関わりたいなどの意見が聞けた。祭りの実行組織である大東七夕祭保存会以外で多数の若者が運営にかかわったことは、とても意味のあることだった。

若者の参画できる仕組みを構築したい、大東地区にとってその足掛かりとなる取組となった。

#### 5 今後の課題と見通し

##### (1) 課題

今年度の取組では、明るい成果があったものの、伝統ある七夕祭りを盛り上げるためには、事業の趣旨にあげた難問の解決ができる人材育成が必要となる。

##### (2) 見通し

大学生や若者グループからは引き続き祭りを盛り上げたい、活動しやすく資金獲得できる組織化が出来ないかなどの前向きな意見が多数あり、若者がやりがいを感じて、参画しやすい組織が構築できるよう地区としても支援していく。

(文責：大東地区 原田憲一)